

ニュースレター

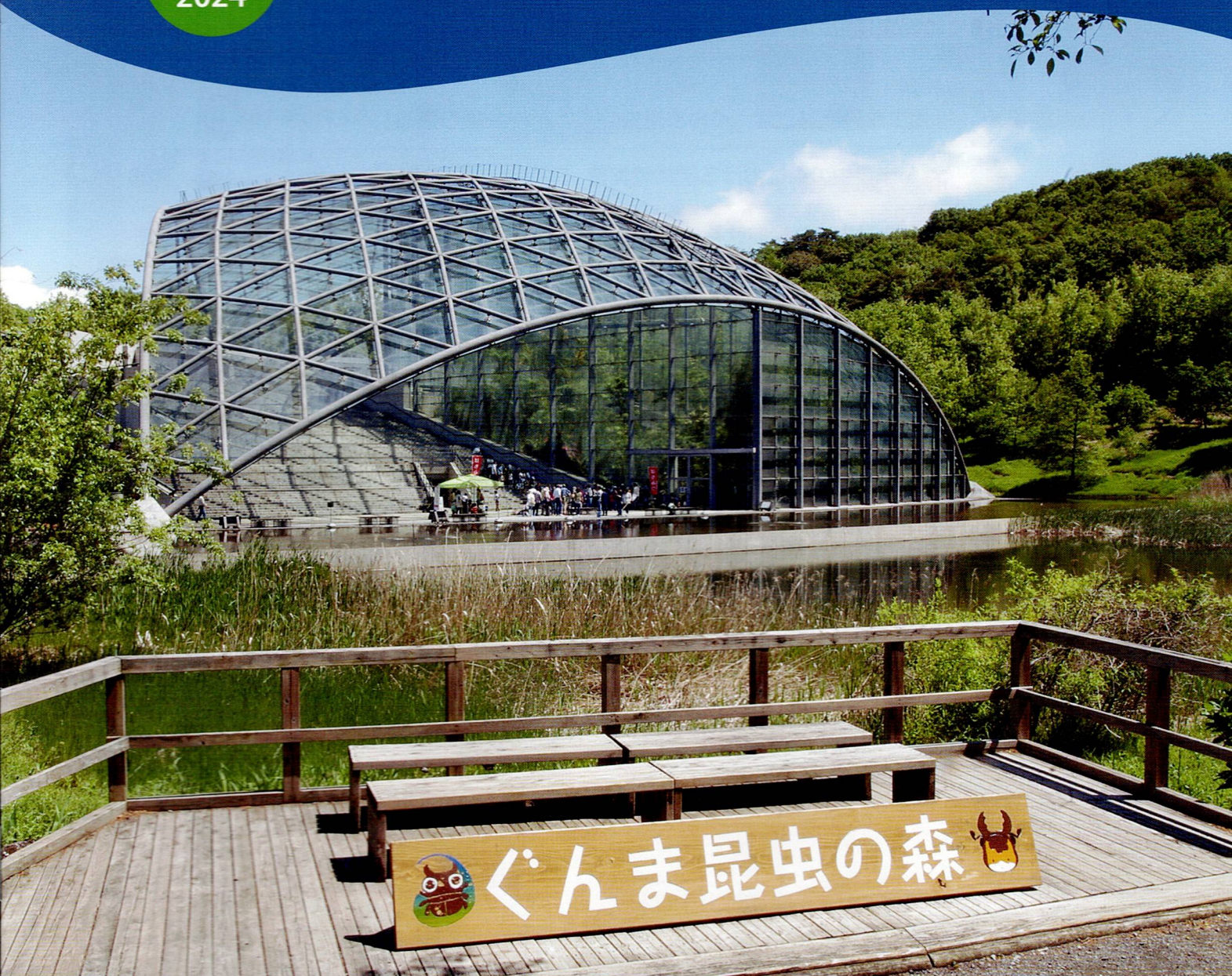


ぐんま昆虫の森

no.42

2024

News Letter GUNMA INSECT WORLD



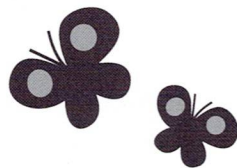
特集

「昆虫館の未来とは
ぐんま昆虫の森の20年を振り返る」



昆虫館の未来とは

ぐんま昆虫の森の20年を振り返る



昆虫企画係 筒井 学

矢島先生の著書「日本の昆虫館」によれば、明治40年（1905）日本にはじめて「昆虫館」なるものが浅草に誕生したであろう記述が残されています。それから120年ほどの時代の変遷の中で、日本の昆虫館はどんな発展をとげたのでしょうか。このことについては「日本の昆虫館」を是非一読いただきたいのと、この仕事に長年関わり続け、時代の変化の中で、現状の問題点、また未来的展望を述べさせていただきます。

世間一般に「昆虫」という対象はどのような位置づけとして捉えられているのでしょうか。子供向けの図鑑シリーズでは、「昆虫」「恐竜」が2大ベストセラーでありながら、子供の「虫離れ」もささやかれます。大人の世界では趣味や興味を持つ方は少数派となります。それでも世界的に日本では文化に昆虫が根付いているという一面があることも確かです。日本の農耕の歴史上「害虫」という負の印象と、一時期の日本経済の発展を支えた「養蚕」という極端な二面性の中で。昆虫という生き物に対して様々な印象が交錯しながら、現代においては、人間の生活圏に存在する不快生物としての印象が強いように思います。利害の中で対象を評価するのも人間の本質とも言えますが、その存在を改めて見つめなおし価値を見出すことができるのも人間であると思います。そもそも、昆虫のほとんどが人間と利害なく存在し、動物界で最も多様であり繁栄している動物群であること、そして、子供たちにとって興味の対象であり、なおかつ、身近な存在であることを改めて見直す時代へと変えていかなくてはならないと切に思います。そこに「昆虫館」という施設の位置づけがあり、環境教育そして情操教育の一端を担うはっきりとした目的が生まれると思います。好きか嫌いかという評価ではなく、教育上優れた対象であり素材として、もっと活用していく必要があるのではないのでしょうか。

昆虫館の位置づけとは

動物群を展示する施設として「動物園」「水族館」があります。一般性では昆虫館はその領域の市民権を得られていないのが現実です。スケールの視覚に訴える対象として小さく、そもそも昆虫を好印象に捉える利用者層が少ないことは否めません。しかし、その外観と生態の多様性は動物界では断トツの話題性を含んでいます。この部分をどのように引き出すかが、昆虫館の活動の使命であり、その構成として展示とプログラムをどのように組み立てるべきかという課題にぶつかっていくわけです。

実体験の大切さ

矢島先生が多摩動物園昆虫生態園を完成させて以降、さらに理想と考えた昆虫館の姿がフィールドを備えた施設でした。それを「ぐんま昆虫の森」に実現させたわけです。昆虫たちが生きる姿と環境を体感的に学んでほしいという考えからです。そこには、環境教育の本質があると思います。環境の大切さ

を学ぶこととは机上論理ではなく、体験を通さなければ理解しづらいという点です。文明が求めた生活志向は、環境への負荷をかけ続け、現状として気候変動に影響を与えているという事実に対し、多くの人間が自然環境の理解と畏敬の念の精神を持たなければ、状況はますます悪化の一途をたどることになるでしょう。昆虫は身近に存在する「環境と生き物のつながり」を理解する格好の対象といえます。それぞれの昆虫がそこに存在する背景には、生存を支え世代を繋ぐ環境要素が存在し、決してそれは単純なものではなく、生態系という相互の関係性も含めて成り立つわけです。教科書には概念図として表されますが、この理論を理解するうえで自然体験が重要なわけです。春夏秋冬、野外で目撃する昆虫のくらしは断片でしかありませんが、体験がもたらす強い印象が「自然界」の理解につながり、地球環境を俯瞰的な視点で捉える感性を育むことにつながっていくと思うのです。人間も自然界に存在する生き物である現実をどう認識するか、そんな体験学習が教育には必要ではないでしょうか。学校では実践しづらい教育プログラムを補完する場として、昆虫施設がもっと身近なものであり、さらに併せ持つフィールドが良好な緑地保全も兼ねて社会に貢献できるのではないかと思います。また、平成7年に環境省によって策定された生物多様性国家戦略に掲げられた「基本戦略4生活・消費活動における生物多様性の価値の認識と行動（一人一人の行動変容）」においても、推進を図る場として昆虫施設の役割があり、それは昆虫館の枠組みに限らず、地域の自然文化施設も含めて望まれます。単なる公園管理から多様な自然環境の復元を目指す方向性の転換と、その意味を発信できるプログラムの場として活用すべきだと思います。

昆虫施設が目指す展示とは

昆虫館はいわゆる「箱物」というカテゴリーに属する施設です。建物の空間の中で展示を行うことは一般の博物館と同類です。自然体験を重視しつつも、展示が昆虫館の根幹であることは言うまでもありません。伝えたい情報をどのように演出するかは、パネルやモニターと造形等といった基本的展示手法の組み合わせとなります。そして、昆虫施設ならではの展示が「生態展示」となるでしょう。「昆虫館」とは広義的に標本を主流とした施設も含まれますが、公の大型施設では生きた昆虫が一年中展示されている大きな特徴を持ちます。テラリウム、アクアリウムを駆使して、多様な昆虫たちの生きた姿の表現こそ、昆虫館の個性であると確信します。そこには、「生きた姿」「生息環境再現」といった動物園、水族館に相当する部分であり、情報と生態を融合させた魅力ある展示表現こそが、昆虫施設が目指すべき展示だと考えます。それは、今も昔も基本的に変わらない手法ではありますが、時代に合わせた演出の限りない探求に尽きます。そして、それに付帯する重要な要素として「チョウの温室」があげられます。矢島先生が手掛けた多摩動物公園昆虫生態園の大温室は、それまでの昆虫館の展示概念を改める画期的なものでした。亜熱帯環境が再現されチョウが舞うガラスドームに人が入るという発想は、それまで前例がない展示形態であり、昆虫館の新たな一歩となりました。この成功事例を皮切りに、1980年代に各地で昆虫館建設が進み、昆虫館の歴史上、大きな転換期であり、発展の時代だったと感じます。ぐんま昆虫の森において、利用者の感想としてもっとも印象的な展示という調査結果があります。四季のある温帯とは異なる環境再現の中で、見られる昆虫たちの違いを感じたならば、環境と生き物のつながりを伝えられるということが展示の意図となります。美しいチョウとの近い距離感は、温室ならではの非日常的体験であり、一般大衆が素直に感動する展示として欠かせない位置づけであることに間違いありません。また、冬場の集客力にも効果を発揮します。このような理想的な展示の実現の背景には、そこに関わる職員の技術と信念。そして、それ相当の運営費がかかるわけです。

政治と昆虫館

ぐんま昆虫の森は総工費70億を投じた大事業です。前例のない、ここまで大規模な昆虫館の建設に至ったのは、当時の知事 小寺弘之さんの思想にほかなりません。経済優先の社会に、心の豊かさを育む教育環境が子供たちに必要と考えたからです。結果的にこの大事業があだとなり、開園の翌年には「無駄な箱物事業」とやり玉にあげられ、政権交代を余儀なくされ、大幅な予算の縮小の中で、かろうじて歩み続けた19年だったと振り返ります。昆虫館を生み出すのも壊すのも、政治にゆだねるものが大きい現実是否めません。未来を担う子供たちに向けた、充実した環境教育こそが、地球環境の未来を左右する重要な要素となる時代を迎えています。政治の流れの中で、新たな昆虫館構想を期待したいものです。

施設運営の流れ

一般論ではありますが、新規博物館プロジェクトに予算が潤沢に付けば、展示業者が最先端の機器を導入した設計を組み、開園当初は見栄えのよいものになります。しかし、5年10年が経過する中で、故障や老朽といった維持費の問題に直面します。結果的に箱物行政批判を生み出し、ますます昆虫館を含めた新規建設は難しい状況を生み出していると感じます。行政が行う教育という投資の中で、どこまで税金で賄うかの指標的判断は難しく、施設規模が巨大であるほど運営管理費は膨らみます。ぐんま昆虫の森では年間維持費として人件費、管理費含め総額約2億円という開園当初のほぼ半分まで減額し、毎年5%減額を強いられる厳しい状況です。年間約10万人の入園者と収益率は7.5%ほどで、今後は入園料値上げなど収益増も検討される中、運営費と成果をどのように評価するか、ひっ迫する地方行政はますます難しい判断を迫られます。

矢島先生が創設された「全国昆虫施設連絡協議会」があり、現在加盟施設は22団体となっています。そして、その多くが指定管理者制度によって運営されています。「昆虫」という分野は専門性が高いという観点での結果と推察します。ぐんま昆虫の森は群馬県直営の施設であり、一般県職員と教員を含めた人員構成の中での運営です。どちらが望ましいか、一長一短はあると思いますが、人事異動するメンバーが7割を占める組織構成は、長期的視野での目標が立てづらく、文化施設管理の特殊性を考慮した人事が必要と感じます。一方で教員在籍による学校連携のしやすさは理にかなっており、県内の小学校の62%（令和6年度）が利用している実績は、補完施設としての役割が、効率的に果たされた先進的事例になったと感じます。

指定管理者における運営であったとしても、施設は自治体が所有するものであり、長期的な視野の中で施設の維持と活用の推進は行政が図るべきです。しかし、専門性がない行政マンが担当者として配置され、専門的文化施設の所管は苦手とするわけです。できることとして、有識者や利用者の意見を取り入れながら運営方針を考える場が持続的に必要と感じます。社会的客観性の中であり方を検証し続ける仕組みづくりが重要と考えます。

未来に向けた運営とは

昨年に開催された国立科学博物館での昆虫をテーマとした企画展では、記録的動員の成果が得られたと聞きますが、広報費や立地条件を含めた条件を満たせば、「昆虫」というテーマに集客力があること

の裏付けになったと認識します。昆虫施設を運営する以上、集客は重要な課題であり、私なりに思う昆虫館の立地条件として、単体よりも複合的施設の一部としての立地が望ましく思います。昆虫に興味がある対象者のみならず、目的施設のついでに見ようという客層も取り込むことで啓蒙効果を高め、入園者増を図る取り組みが理想的と考えます。具体的発想の一例としては、子供たちに人気の高い恐竜博物館と昆虫館を併設すれば、集客としての相乗効果がもっとも望める組み合わせであり、地球の歴史も含めて学べる点で教育的効果も望めます。現在の多摩動物公園昆虫園のように、動物群の一部としての扱いで、動物園内に設置もしくは併設することも理想的ですが、同様の取り組みは他では見られません。いずれにしても、地方において、集客を望む特色ある文化施設として、昆虫館は十分に可能性がある施設だと思います。

過去十年ほどの世相として、情報のグローバル化が客観的日本文化の評価を生み出し、インバウンド促進につながる大きな時代の転換期を迎えつつあります。「昆虫」というテーマにおいての発展性は、大いに期待ができる分野だと思います。

「昆虫」というテーマは文化的に階層が深く、子供たちの興味の対象から大人の趣味、そして、学術における専門性が高い分野が存在します。昆虫館が目指すべき運営は、一般大衆に向けた昆虫の総合窓口であり、それぞれのジャンルの情報収集を行い、バランスよく展示やプログラムに反映し社会に発信する拠点でもあります。前述したような行政が運営する教育施設という概念から、アミューズメント性の強い志向で、収益力を持った企業運営の時代もいつしか来るかもしれません。

最終的に、昆虫施設の未来は、社会の動向に左右はされつつも、そこに関わる人と組織にゆだねられ、昆虫館存在意義の強い信念の中で、どのような活動を行い、社会に評価されるかにかかっていると私は思います。

私はぐんま昆虫の森の建設からかわり、準備から25年、開園からほぼ20年が経過しました。今思うことは、巨匠の建築デザインが必要であったかとか、展示工事予算が削られ、一階のフロアーが伽藍洞になったこと、巨額を投じた映像トンネルは開園2年後に廃止となったことなど、昆虫館として何に予算を投じるべきかの疑問を残しました。結果的に開園後の映像トンネルのリニューアルや、1階フロアーの展示切り替えに翻弄され、予算的に厳しい運営が迫られる中で、抗い続けた日々と記憶します。ある意味、その状況で得たものは多く、展示の部分でいえば、予算をかけずにどこまで何ができるか、内製化を極力図る上でのスキルを向上させる機会を与えられたことに感謝します。矢島先生が創り上げた最後の昆虫館であり、集大成といえるこの施設に関われたことを誇りと思いながら、未来に向けて、昆虫館がますます発展し続けることを切に願います。

参考文献

- 矢島 稔 (1995) 昆虫館のあゆみとその未来 インセクトリウム 11+12 (4-9)
矢島 稔 (2012) 日本の昆虫館 戦後と戦前のあゆみ 東海大学出版会